

2018年1月24日

報道関係各位

公益財団法人 笹川スポーツ財団

1964年東京オリンピックから世界に広がった「ピクトグラム(絵文字)」 羽田空港で93カ国の選手団を“道案内”したデザイナー 村越 愛策 氏 スペシャルインタビュー 公開

「スポーツ・フォー・エブリワン」を推進する、笹川スポーツ財団（所在地：東京都港区 理事長：渡邊一利 以下：SSF）では、スポーツの価値や意義を検証し、あるべきスポーツの未来について考える機会として、日本のスポーツの歴史を築かれた方々へのインタビュー記事「スポーツ歴史の検証」(<http://www.ssf.or.jp/history/tabid/811/Default.aspx>)を連載しています。

今回ご登場いただくのは、1964年東京オリンピックに際し、言語・文化の異なる世界各国の人々が利用する羽田空港で、ピクトグラム（絵文字）の案内板を制作した村越愛策さんです。今では日常生活でもよく見かけるピクトグラムは、実は64年東京大会のレガシーの一つ。ピクトグラムを施設案内だけでなく「競技シンボル」に使用したのは東京大会が初めてのことで、その後のオリンピックでも採用され、世界に広がっていきました。

羽田空港のピクトグラム制作を担当した村越さんは、外国の人にも理解できるものをデザインするにあたって、満州で過ごした幼少時代に言葉の通じない中で遊んだり交流をした経験が大きく影響していたといいます。東京大会でのピクトグラム導入・整備の経緯や2020年大会に期待されることなどをお話いただきました。

笹川スポーツ財団 スペシャルサイト『スポーツ歴史の検証』 第68回 1964年をきっかけに世界へ広がった「ピクトグラム」 村越 愛策 氏

スポーツ歴史の検証 で検索ください！

【URL】 <http://www.ssf.or.jp/ssf/tabid/813/pdid/264/Default.aspx>

【主な内容】「形態は機能に従う」ことを学んだ少年時代／「オリンピック景気」で高まった商業デザインの需要／欧州発祥の「ピクトグラム」を整備、統一／「半永久的に継承される道案内人」人生の始まり／いつの時代も変わらない「単純化」「シンプルさ」の重要性



村越 愛策（むらこし あいさく）氏

1931年、満州生まれ。56年、千葉大学工学部工業意匠科を卒業した後、フリーランスデザイナーを経て村越愛策デザイン事務所を設立。国内外の空港、東北・上越新幹線、地下鉄・私鉄駅、公共機関・自治体・病院など幅広い分野の施設で公共サインを手掛ける。

インタビュアー 佐塚 元章（さづか もとあき）氏

元NHKチーフアナウンサー。現在はラジオアナウンサーなどを務める。1992年バルセロナオリンピックの開会式、岩崎恭子の最年少金メダル獲得（水泳）などの実況をはじめ、スポーツ実況を25年間担当した。

<スポーツ歴史の検証>概要

【企画制作】公益財団法人笹川スポーツ財団

【後援】スポーツ庁、東京都、公益財団法人日本体育協会、公益財団法人日本オリンピック委員会ほか

【特別協力】株式会社アシックス